

詩人・朗読家 詩村あかね 書き下ろし作品&メッセージ

詩とメルヘン絵本館開館 25 周年・雑誌『詩とメルヘン』創刊 50 周年を記念して、4 号に分けて詩人・朗読家の詩村あかねさんとイラストレーターの内田新哉さんにインタビューを行い、詩とイラストの特別かき下ろし作品を寄稿していただきます。

第 2 弾となる今号では、2023 年 10 月 8 日（日）～9 日（月）にやなせたかし記念館を訪れ、詩とメルヘン絵本館ややなせたかし名誉館長ゆかりの地を巡った詩村あかねさんから、その感想などを伺うとともに、特別企画に寄せられた詩とメッセージをご紹介します。

太陽に愛された場所～やなせ先生の故郷と記念館を訪ねて～ 詩村あかね

やなせ先生の故郷に向かうため高知駅へ。駅でアンパンマンの巨大な縫いぐるみに迎えられ、仲間たちがペイントされた階段を上る。駅全体の明るさは先生の代表作であるキャラクターたちの丸い笑顔と色彩が醸しだしている。

鳥の囀りが響く山懐に建つ「アンパンマンミュージアム」と「詩とメルヘン絵本館」に到着。ミュージアムでは、イタリアのカンポ広場がモチーフというエントランスに注目。緩い傾斜のついた床と劇場型の階段には楽しい仕掛けがあり、姿も美しい。先生の筆致が見て取れる壁画。名誉館長室の書棚。廊下や椅子に至るまで、先生のサービス精神と遊び心が偲ばれる。ギャラリーで迫力あるタブロー画を前にしたとき、肉厚であたたかい先生の手を思い出した。アンパンマンに託した先生の衷心を深く理解出来た気がする。

隣接する「詩とメルヘン絵本館」へ。願いが叶った。『詩とメルヘン』愛読者の聖地。精神の拠り所である。外観の静謐さ。ギャラリーに射し込む柔らかな光や内装の緩やかなフォルムにも畏敬の想いが湧き上がる。初めて来たのに堪らなく懐かしい。ミュージアムと絵本館を先生がどれだけ愛されていたか。このふたつの建物は先生のモニュメントそのものだ。不思議なほど心身がリラックスしていた。

翌日は先生のもとへ。ホオノキの若木が寄り添う先生と奥様の眠る墓碑に掌を合わせた。柳瀬家のあった香美市朴ノ木。地名になったホオノキは、刃物を傷めず水に強い木質で、まな板や下駄に使われる陰の立役者的木材。先生はその木を自らの生き方に重ね、愛されていたのだろう。詩に詠い、絵本の主人公として描いている。先生が幼少期に眺めた御在所山や弟さんと遊んだ物部川の景観が琴線に触れ、暫し佇む。

香北体育センターのタイル壁画「太陽の故郷」を見るために移動。先生が故郷で最初に取り組みされたお仕事である。太陽が青のグラデーションで表現され、虹色の道が遠くまで続く。駐車場には「手のひらを太陽に」の歌碑が建つ。この地は太陽に愛されているのだ。

先生が 10 代を過ごした南国市後免町へ。JR 土讃線後免駅には「ごめん、ごめん」の構内アナウンスが響き、ホームには先生の「ごめん」の詩碑が建つ。後免駅から遠くない場所にごめん・なはり線の後免町駅がある。駅名が似ていて紛らわしいので先生は後免町駅に「ありがとう駅」と愛称をつけられた。「ごめん」と「ありがとう」。易しい言葉なのに口にするのは案外難しい。乗降するたびに耳目から流れ込む「ごめん、ありがとう」は駅を使う人を温良恭儉な境地へと誘っているに違いない。

先生の養父（伯父）が開業していた柳瀬医院跡地へ。現在は記念公園になっている。ここを起点に先生の母校である後免野田小学校までの道を歩いた。通学路には澄んだ水が流れる舟入川があり野原や田んぼが点在する。やがて、先生デザインの G ちゃん N ちゃんが描かれた校舎が見えてくる。星のステッキを手を持った天使のキャラクター。この校庭に「やなせライオン」が鎮座する。かつて柳瀬医院の向かいにあった石材店が、受注した唐獅子を獅子と間違えて彫ったライオンの石像。それを医院が引き取り庭に置いた。先生にとって夭折された弟さんと共に楽しい幼少期を過ごした石ライオンだ。驚はあるけれど、優しいお母さんのようだった。石ライオンの鼻を撫でていたら『やさしいライオン』のムクムクに見えてきた。

草はらのベンチに腰掛けるとさりげなく隣にアンパンマンが座っている町。先生の故郷は、先生の遺作が躍動する生きたギャラリーのようだった。

そして、記念館の学芸員、スタッフの皆さまのお人柄は、人を楽しませることに情熱を持つ、やなせ先生と重なる。記念館を想って日々尽力されている。

旅を終え、帰りの電車で揺られているとひとつのメッセージが降りてきた。「人に喜んでもらえる仕事をしなさい。情熱を持ち続けて！」と。

先生に新たなお言葉を頂いた。この旅のすべてに感謝。先生、ありがとうございました。

「詩と」

詩村あかね

ことばのサナギをすりと脱ぐ朝。

わたしの身体は機嫌がいい。

空の端にちょこんと座って

オオタカを真似るカケスの声を聞いている。

きよきよきよきよ きよきよきよ ひゅーひゅー ひゅーひゅー ひゅーひゅー

嘴から木の実を落としても 歌うのに熱心だ。

蒼炎の空から落ちてくる実を 鼻歌でせつせと埋める。

詩と

来年の春の森を語りながら。

このふゆは むしのなかにいることにした。

あら そう いいねえ。虫になりたかった 硬い鞘翅まやばねの中に透き通る下翅かじを持つ甲虫に。

かたくて はかないもの。 うん いいね。

真夜中のコウモリっていう名前のインクをみつけたから バニラホワイトの紙にかいてみた。

くらくて おいしそうだ。 うたえる。

詩と

ぼくぼく歩きながら話すのはゆかい。

背中がかゆい時 おしりが痛いって言ってみようかな。

ちょっとまげるだけで シュールだな。

イミなんてキュークツなだけ オトのほうがしびれる。

言語化って点滅信号みたいだからね 正しすぎて死にたくなる。

シにたくなるとき いちばんイキテル。 わらわらわら

詩と

お茶のようなギロンをたたかわす。

相互作用から抜け出す方法を考えていたんだ。

またオフロで？ だつりよくすると うくもんね。

浮力って 揚力に似ている。 浮いてると ときどき飛べる。

とべたら うたがはじまる たのしいね。

かいているときだけが じぶん。 それがいいは はんぶん。

詩と

まるごとの自分をいきている。

詩とメルヘン絵本館創立 25 周年・『詩とメルヘン』創刊 50 周年に寄せて

1973 年創刊号の編集後記に「詩は楽しむことが第一。理論でこねくりまわしてもしかたがない」との、やなせ先生のお言葉がある。創立 25 周年・創刊 50 周年に向けた詩の創作は私にとって、この上ない幸せな時間となった。詩との楽しい関係性を綴ったこの作品を皆さまと共有出来たら嬉しい。詩作を『詩とメルヘン』から始めることが出来た私は幸運だった。Life with poetry！傍らに詩を置く豊かさを未来永劫「詩とメルヘン絵本館」から発信し続けて下さいますように。



詩村 あかね（うたむら あかね）

東京生まれ。詩人、朗読家。第 16 回詩とメルヘン賞、白鳥省吾賞最優秀賞、埼玉文学賞他詩作での受賞歴多数。詩集『風が運べないものたちへ』（サンリオ）、最新詩集『鳥のいる場所』（RANGAI 文庫電子版）。「子どもと本の会 MOMO」を主宰。子ども向け読書サービス歴 16 年。自作朗読、物語や民話の朗読会を各地で開催。「朗読サロン・うたの樹」を東京で定期開催。